

消えた美しい不思議なにじ

小川未明

青空文庫

それは、ここからは見えなところですよ。

そこには黒い、黒い河が流れています。どうしたことか、その河の水は真つ黒でありました。河が真つ黒であつたばかりでなく、河原の砂もまた真つ黒でありました。そして、その河は音もたてずに、また真つ黒な大きな森の中をくぐつて、いずこともなく流れているのであります。

空の色は、夜ともつかず、また昼ともつかずに、うす暗くぼんやりとしていました。ただ、ため息のように、風が吹いて、忍び足にどこへかいくのでありました。そして、そのところには、生き物というものは、なにひとつ動いている姿を見ることができませんでした。ただ河原を怪しげな女が歩いているばかりでありました。

いったい、この怪しげな女はなにものでありましょうか。年をとっているのか、また、そんなに年をとつていないのか、見ただけではわかりませんでした。顔も肩さきも、その長い真つ黒な髪の毛に隠れていてよく見ることができませんでした。

たまたま髪の毛の間から血の気のない顔が現れたかと思うと、ガラス球のように光つた目が、氷のように冷たくあたりを見まわしていたのであります。

この怪しげな女は、灰色の着物を着ていました。そして、めったに笑うこともありませんでした。女は、やせて骨ばかりになった手をのばして足もとの真つ黒な砂をすくいました。そして、なにか口の中で唱えながら、それを空に向かって投げました。また、あるときは、その河の真つ黒な水を柄の長い杓子ですくっては、やはりなにやら口の中で唱えながら、それを空に向かってまいていました。そして、その後でさも心地よさそうに、げらげらと笑っていたのです。

この怪しげな女は姉のほうでありました。

「こうして、わたしは、わざわいの砂や、水をまいてやる。これはみんな下界に落ちていて人間どもの頭にふりかかる。この砂のかかったものには不平がつづき、この水のかかったものは死んでしまうだろう。わたしは、みんなが不平に苦しみ、そして死んでしまうことを望んでいる。わたしはこんな醜い姿に生まれてきた。この宇宙の、ありとあらゆる生き物の命をのろつてやる。そうだ、みんな滅ぼしてしまふまでは、こうして、わざわいの砂と死の水をふりまくことをやめはしない。」と、灰色の着物を着た姉のほうがいいました。そして、彼女は砂をまき、水をまいていました。

ここは、また別のところであります。

そこには水^{すい}晶^{しょう}のように清^{きよ}らかな流^{なが}れがありました。そして、その河^{かわ}原^{はら}の砂^{すな}は黄^{こが}金^ねのごとく光^{ひか}っていました。大^{おお}空^{ぞら}はいつもうららかに晴^はれて、い^い香^{にお}いのする紫^{むらさき}や、赤^{あか}や、青^{あお}や、白^{しろ}の花^{はな}が一^{めん}面に咲^さいていました。太^{たい}陽^{よう}の光^{ひかり}は、その河^{かわ}水^{みづ}の上^{うへ}にも、花^{はな}の上^{うへ}にも、また砂^{すな}の上^{うへ}にもいつもあふれていました。

東^{しのめ}雲^{のめ}の空^{そら}色^{いろ}のような、また平^{へい}和^わな入^いり日^ひの空^{そら}色^{いろ}のような、うす紅^{あか}い色^{いろ}の着^き物^{もの}をきいた少^{しょう}女^{じょ}が、この楽^{らく}園^{えん}を歩^{ある}いていたのです。その少^{しょう}女^{じょ}は妹^{いもうと}のほうでありましたけれど、ようすも心^{こころ}も、まったく姉^{あね}とは反^{はん}対^{たい}でありました。妹^{いもうと}はこのうえなく美^{うつく}しく、また快^{かい}活^{かつ}でありましたから、すべての命^{いのち}あるものにはかわいがられていたのです。

彼^{かの}女^{じょ}がその星^{ほし}のような瞳^{ひとみ}をじつと落^おとすと、花^{はな}は生^いき生^いきとして香^かりましました。河^{かわ}水^{みづ}は声^{こえ}をたてて笑^{わら}いました。そして光^{ひか}る砂^{すな}は、いつそうきらきらと輝^{かがや}いて見^みえたのでありました。少^{しょう}女^{じょ}は、白^{しろ}い柔^{やわ}らかな手^てで金^{こん}色^{じき}の砂^{すな}をすくいしました。そして、それを清^{きよ}らかな水^{みづ}の中^{なか}に投^なげています。

「どうかこの幸^{こう}福^{ふく}がめぐりめぐって、すべての命^{いのち}あるものの上^{うへ}に宿^{やど}るように。みんなが幸^{こう}福^{ふく}で、平^{へい}和^わで仲^{なか}よく暮^くらすように。」といつては、その黄^{こが}金^ね色^{いろ}に光^{ひか}る砂^{すな}を河^{かわ}の流^{なが}れに投^なげていました。清^{きよ}らかな水^{みづ}の中^{なか}が、たちまち炎^{ほのお}の燃^もえたつように明^{あか}るく輝^{かがや}いて見えま

した。そして幸福こうふくのにじは、遠く河かわの中からわきあがって、下界げかいにまで、長い橋はしを懸かけていたのでありました。

このにじが空そらにかかる、下界げかいに幸福こうふくが降ふつたのであります。

ある日ひ、暗くらい空そらのかたに、美しいにじのたつのを怪あやしげなふうをした姉あねが見みました。

そしてガラス球だまのような、冷ひややかに光ひかる目めでじつとそれを見ていました。が、やがて舌打したうちをして、いまいましそうにいいました。

「ほんとうに憎にくい妹いもうとだ。わたしが、こうして下界げかいのものを苦くるしめ困こまらしてやろうといっしょうけんめいに、黒くろい砂すなをまいたり、河かわ水みずをまいたりしているのに、あちらではその邪魔じゃまをしている。あんなに幸福こうふくのにじがかかった。またそれだけ下界げかいの滅ほろびるのが長引ながびくわけだ。よし、妹いもうとがそういうようにみんなを守る気きなら、わたしはいっそう根気こんきよくみんなをのろってやろう。」と、姉あねはいいました。そして、夜よるも、昼ひるも、小止おやみなく砂すなをまき、水みずをまいていました。

「もう、ずいぶんわたしは、こうしてわざわいの砂すなをまいたり、水みずをまいたりした。たいてい下界げかいのものどもは滅ほろびる時分じぶんであろうと思おもうが、どうであろうか。あのりこうなからすは、どうしたかやってこない。また、あの智慧ちえのあるふくろうはどうしたか、とんと姿すがた

を見せない。あの二人がやってきたなら、そのようすは知れるだろう。」と、姉は独り言をしていました。

するとある日のこと、黒い森のかなたで、からすのなき声がしました。

「あのからすめがやってきたな。」と、姉は耳をそばだて、口もとに気味の悪い笑いを見せました。すると翼の音がして、大きな一羽のからすが降りてきました。

「よくやってきた。おまえのくるのを待っていた。下界のようすはどうだ。」と、姉はからすに向かつてたずねました。

「私はちょうど三百歳になります。だいぶん年をとりました。前は百五十日めまできましたのが、二百十日もかかります。下界は、戦争があつたり、地震があつたり、海嘯があつたり、また饑饉がありまして、人間は幾百万人となく死んでいます。けれど、まだなかなか滅びるようなことはありません。」と、からすは答えました。

髪の毛の長い、灰色の着物を着た姉は黙って聞いていましたが、

「おまえは下界を立つたのは、二百十日前だ。それまでにわたしは、どれほど砂や水をまいたか知らない。いまごろはもつとたくさん人間や生き物が死んでいるだろう。その後のようにすが知りたいものだ。」と、姉はいいました。

年とつたからすは、長い旅に疲れて、杭に止まって居眠りをしていました。姉は、黒い河からへびのような長い魚をとつて、からすに食わせました。からすはまた下界に向かつて旅立ちをしたのであります。

からすが去つてから、約十日めにふくろうが帰つてきました。

「その後の下界のようすはどんなであるか。」と、姉はききました。

「悪病が流行しています。その伝染の速さといったら風のようにあります。この分なら人間がみんな死に絶えてしまふであろうと思います。」と、ふくろうはいいました。

姉はこれをきくと、たいそう喜びました。

「きつと、そのことは、あのおいぼれたからすめの立つた後のできごとであろう。」といつて、姉は河の中から、長いへびのような黒い魚をいくつもとつて、ふくろうにやつていました。

ふくろうは、黒い森の王さまにされました。

幸福を下界に贈ろうと思つて、いっしょうけんめいに黄金色に輝く砂を河の中に投げていました。妹は、もうこれほどまでに幸福を送つたことだから、きつと下界はどんな

にか幸福がゆきわたっていることだろうと思いました。

「あの元気のいいはとはまだ帰つてこないだろうか。あれがきたら、すべてのようすがわかるのだが。」と、妹はよく晴れわたった空をながめていました。

ある日のこと、まだ太陽が出ない前でありました。頭の上に翼の音が聞こえたかと思うと、美しい白ばとが大空をまわりながら地の上に降りてきました。

「お早う。おまえの元気のいい顔を見ると、わたしの心までせいせいします。なにかいい報知を持ってきたことと思うが、きかせておくれ。」と、妹は、はとに向かつていいました。

白ばとは、円い目をみはりながら、若い女神の顔を見ていましたが、

「それは下界はにぎやかなものでございます。毎日毎日、たくさんな婚礼があつて、祝いの鐘が鳴り響いています。また、なにかのお祭りがあつて、そのたびに花火の音が、

あちらでも、こちらでもしています。また、後から後からと人間の家では子供が産まれています。この分ではじめましたら、下界はやがて幸福でいっぱいになって、人間はみんな命の短いのを恨むばかりであります。」と申しました。

妹は笑つて、はとのいうことを聞いていました。

「それでは、わたしの思いがつかなくなつたというものだ。ああ、こんなうれしいことはない。あのいじ悪の姉がいくら、みんなを不幸に陥れようとしても、ついに愛の力には勝てなかつた。それでこの宇宙は正しい目的を果たしたというものです。」と、妹は、喜んでいました。

そのうちに、また、ある日のこと、かわいらしいひばりが帰つてきました。妹は、ひばりの長い旅をいたわりました。そして、ひばりに下界の有様をたずねました。

「ご安心遊ばしてください、下界は穀物がすきまもなく、野に、山に、圃にしげつています。また樹々には果物が重なり合つて実つています。みんなは自分たちが食いきれぬほど収穫のあるのを喜んでいます。その有り様は、とてもこの天国の楽園の有様どころではありません。」と、ひばりは、驚いたふうをしていました。

「なに、この楽園よりも、もっと下界は美しいというのか？」と、妹は、美しい目を大きくしてたずねられました。

「人間は、このごろいろいろの花を、自分たちで変化をさせる術を覚えたので、みごとに咲かしています。あんな美しい花は、この天国にきましても容易に見ることはできません。」と、ひばりは申しました。

妹いもうとの女神めがみは、黙だまつてひばりのいうことを聞きいていました。そのうちに、自分じぶんも一度下界どげかいへいつて、その有あり様さまを一目見ひとめみてきたいものだと思おもわれたのであります。

ついに妹いもうとは、下界げかいへゆく決心けつしんをしました。けれど、そのようなでは途中とちゆう、風かぜや、雲くもや、雨あめや、また多くの星ほしなどに、どこへゆくかと目めについてたずねられることをうるさく思おもいましたから、はとに姿すがたを変かえてゆくことにしました。

ある日ひのこと、彼女かのじよはまっすぐに下界げかいを目めがけて飛とんできました。

高い山たかやまが目めに入り、ついで、いろいろの建物たてものが目めに入るように近づちかきました。すると、円まるい屋根やねもあれば、またとがったのもありました。赤あかい色いろで塗ぬった建物たてものもあれば、白しろい色いろで塗ぬった建物たてものもあれば、青あおい色いろで塗ぬられた建物たてものもあります。五階かいも十階かいもある大きな家いえもあれば、またこぢんまりとしたきれいな家いえもありました。はどのいったように、い音楽おんがくの音ねいろ色が街まちの中なかから流ながれていました。そして夜よるになると、街まちは一面めんに美しい燈ともし火びの海うみとなつたのであります。

「こんなに美しいとは思おもわなかつた。」と、妹いもうとは驚おどろきました。

夜よが明あけると、人々ひとびとは、きれいなふうをして自動車じどうしゃに乗のつたり、馬車ばしゃに乗のつたり、また電車でんしゃに乗のつたりして往來おうらいしていました。

「なるほど、みんなはしあわせであるらしい。」と、妹は喜びました。

そのとき、ふとしたきたないふうをした人間が、はだしでみんなの通る間を、とぼとぼと歩いていました。

「あの人間は、どうしたのだろう。」と、妹は思いました。自分の投げた幸福の砂がひとりこの人間にだけかからないはずはない。それにしても、この貧しげな有り様はどうしたのだろうと不思議に思われて、なおもその人間のゆく先を見つづけていました。

そのきたならしいふうをした人間は、にぎやかな街の中を通って、さびしい町はずれの方^{ほう}にやってきました。するとそこには、いままでと反対に、みすばらしい破れた小舎^{こや}が幾棟^{いくむね}もつづいていました。そして、その中には、みんなこの人間のようなきたないふうをした、青い顔^{あおかお}の人間がうようよとして住んでいるのでありました。そこでは、子供^{こども}が泣いています。病人^{びょうにん}が苦しんでいます。けれどそれをいたわることも、また救う^{すく}こともできないほどに、みんながなにか仕事をしたり、働いています。そして貧乏^{びんぼう}をしています。

「これは、いったいどうしたことだ？」と、妹の顔は、驚きと怪しみのために血の気がだんだん失せてゆくのでした。自分の投げた幸福が、この人たちだけゆきわたらないはず

がないのに、これはいつたいどうしたことだろうと判断に苦しんだのであります。彼女は、はとや、ひばりのいうことを聞いて、もしそれだけを信じていれば、なにも知らずにしまったのだと思いました。

それから妹は、もつと道を歩いていきますと、ある大きな木の下に、十ばかりと七つ八つになった、兄弟二人の子供がうずくまつているのを見つけました。

「どうしておまえたちはこんなところに、こうしているのか。」といって、彼女はききました。

二人の子供は、美しい妹の女神をながめました。

「私たちには家というものがありません。毎晩この木の下で寝るのです。お父さんは死んでおりません。お母さんは、ほうぼうを歩いて、ものをもらって帰ってきます。私たちはここにお母さんの帰るのを待っているのです。」と答えました。

これをきくと、やさしい妹はびっくりしました。そして、

「もうこんな惨めな下界には一刻もいたくない。」といって、妹はふたたびはとの姿となつて、天上の樂園に帰ってしまったのです。

妹は、樂園に帰ると、さつそく、風と雨とを自分の前へ呼び寄せました。そして、風

や、雨^{あめ}に向^むかつて、

「おまえたちは、毎^{まい}晩^{ばん}のように、あの不幸^{ふこう}な子供^{こども}たちを吹^ふいたり、ぬらしたりして、かわいそうだとは思^{おも}わなかつたか。」と、やさしい妹^{いもうと}はたずねました。

すると、風^{かぜ}も、雨^{あめ}も、声^{こえ}をそろえて、

「私^{わたし}どもは、かわいそうに思^{おも}っていました。それであの二人^{ふたり}の子^こたちを吹^ふいたり、またぬらしたりしたときも、強^{つよ}くなれ、強^{つよ}くなれ、そして、大^{おお}きくなれ！ といつて、なるだけひどく苦^{くる}しみないようになりました。しかし、不幸^{ふこう}な子供^{こども}は、けつしてあの二人^{ふたり}だけではありません。まだたくさん、たくさん、子供^{こども}があります。」と答^{こた}えました。

妹^{いもうと}は、風^{かぜ}や、雨^{あめ}に、もう帰^{かえ}つてもいいといいました。そして、独^{ひと}りとなつたとき、妹^{いもうと}はかんがえました。

「わたしは、これまで、幸^{こう}福^{ふく}の砂^{すな}を河^{かわ}の中^{なか}に投^なげていろいろの喜^{よろこ}びを下^げ界^{かい}に送^{おく}つたものも、けつしてある人^{ひと}々^{びと}だけを楽し^{たの}ませるためではなかつた。みんなのものを喜^{よろこ}ばせるためであつた。それが、ある人^{ひと}々^{びと}だけをあんなに幸^{こう}福^{ふく}にさせ、ある人^{ひと}々^{びと}をあんなに不^ふしあわせにしようとは、思^{おも}いもよらないことであつた。もうこのうえ幸^{こう}福^{ふく}の砂^{すな}を骨^{おね}をおつて、河^{かわ}に投^なげることもあるまい。こうして見^みると、やはり姉^{ねえ}さんが、わたしよりもこうであ

るかもしれない。冷酷な姉さんは、よくわたしをわらったものだ。」と、妹は思いました。それから妹は、もう黄金の砂を河の中に投げることを止めてしまいました。下界から遠く空を仰ぐと、天の河の色がだんだんと白くなつて、そのときから黄金に輝いて見えなくなつたのであります。

一方、灰色の着物を着た姉は、ふくろうや、からすのいうことを信じて、自分も下界へいつて、その困つたり、苦しんだりしている人間のようにすを、つくづくと見てきたいものだと思ひました。

灰色の着物を着た姉は、べつに姿を変える必要もなかつたので、ある星の光ももれない真つ暗な真夜中に下界へ降りてきたのです。

そこは広い野原の中でありました。けれどわざわいを下界にまいた姉は、どんなさびしいところを歩いてても平氣でありました。野原の中には林がありました。林をぬけると大きな墓地があります。そこにはたくさんの墓がありました。古いのや、まだ新しいのや、丈の高いのや、低いのがありました。それをば、闇をすかして見まわしながら、姉はさも心地よさそうに笑いました。そして墓地を過ぎて、丘にさしかかりますと、そこには大きな病院があります。髪の毛を長くうしろに垂らした姉は、病院の内部に忍び込んで、

病人^{びょうにん}のいるへやを、一つ一つのぞいて歩きまわした。中には青い顔^{あおのかほ}をして、うめいて、眠^{ねむ}られずにいるものもあります。また、中には苦痛^{くつう}にたえられないで、泣^ないているものもあります。中には片腕^{かたうで}を切^きられ、また両脚^{りょうあし}を切斷^{せつだん}されて不具者^{ふぐしや}になっているものもあります。そして今夜^{こんや}にも死^しにそうな重い病^{おも}人^{びょうにん}もありました。

姉^{あね}は、これらの人々^{ひとびと}を見ると、さも心^{こころ}からうれしそうにほほえみました。

「わたしの顔^{かお}がいくら醜^{みにく}いといったとて、よもやこれほどではあるまい。」といって、なおあたりをさまよっていました。すると、すぐ隣^{となり}には狂人^{きやうじん}を容^いれた病院^{びょういん}があつたのです。

その精神病院^{せいしんびょういん}には、女^{おんな}や、男^{おとこ}の白痴^{はくち}がうようよしていました。昼^{ひる}も夜^{よる}も見分^{みわ}けがつかずに、彼^{かれ}らは泣^ないたり、わめいたり、悲^{かな}しんだり、また声^{こゑ}をたてて笑^{わら}つたりしていました。そしてじつとしているものもあれば、また、たえず歩^{ある}きまわっているものもありました。

これを見ると、残忍^{ざんにん}な姉^{あね}は、あまりのうれしさに身震^{みふる}いがしたのです。

「ああ、これでいい。下界^{げかい}の破滅^{はめつ}も近^{ちか}づいた。」といいながら、歩^{ある}いていますうちに、いつしか街^{まち}へ出^でてしまいました。

そこには、大きな建物が、ひっそりとして死んだもののように横たわっていました。
 姉は、右を見、左を見ていますうちに、一軒燈火のついた明るい店を見つけました。彼女
 女は、忍び足をして、その家に近づいてのぞいてみようと、中では美しい女や、男がた
 くさんに集まっていて楽器を鳴らし、唄をうたい、酒を飲んだり、また、たがいに手をと
 りあつて、踊ったりして遊んでいたのであります。

「これは、また、なんとということだ。」と、姉はいまいましたように、ガラス球のような冷
 たい目を光らして闇の中から、それらのおもしろそうに遊んでいる人たちをにらみました。
 ここばかりは、自分のまいたわざわいの砂や河の水がかからなかったのかと疑いながら、
 その家の前をおそろしい顔をして通りました。

すると、また一軒燈火のついた家がありました。のぞいてみると、そこにもまた、
 たくさんの人々が集まっておもしろそうに笑ったり、唄をうたったりして酒を飲んでい
 ました。

「いよいよ不思議なことだ。どうしてこれらの人たちには、わたしのまいた砂や、水はか
 からなかったろう。」と、疑いながら、姉はその家の前を怒りながら通りすぎました。

この分なら、まだ世間には、どんな幸福な人たちが住んでいまいものでもない、彼

のじよ 女は不安に感じてきました。そしてもう一軒、念のために、かすかに燈火のもれる大きな家の窓さきに近寄って、戸のすきまからのぞいてみますと、へやのうちでは、美しい姉と妹が、真珠や、ルビーのはいった指輪や、腕輪を、いくつも取り出して見くらべているのでした。そしてまたそのへやの中には、ピアノがあったり、ぜいたくな飾りのついた鏡が置いてあったり、ほかにも大きな額などがかかっていました。

「わたしは、みんなの幸福をのろったけれど、こういうように、ある一部の人々が不しあわせで、ある一部の人々がしあわせであることを望まなかった。わたしは、なにもある一部の人たちにかぎって憎しみがあるのではない。平等にみんなをのろったのであつた。それなのに、この有り様はどうしたことであらう。」と、灰色の着物を着た姉は思いました。

彼女は、その夜の中に、黒い流れのほとりに帰ってきました。そして、黒い森の王さまにしたふくろうを呼び出して、なぜうそをいったかとしかつて、森の中から追い出してしまいました。

うす紅色の着物を着た妹は、このうえ黄金の砂を河に投げることは、かえって不幸の人々を増すばかりだといって、ついに幸福を下界に送ることを見合わせてしまいました。

た。独^{ひと}り灰^{はい}色^{いろ}の着^き物^{もの}を着^きた姉^{あね}は、どうかしてみんなを、一度^{いど}はわざわいの砂^{すな}と水^{みず}に浴^あび
させて、苦^{くる}しめてやらなければならぬといつて、執^{しゅう}念^{ねん}深^{ふか}く、いまだに夜^{よる}も昼^{ひる}も黒^{くろ}い
砂^{すな}をまき、黒^{くろ}い河^{かわ}水^{みず}をすくつて下^げ界^{かい}に向^むかつてまいているということでもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「童話」

1921（大正10）年8月

※表題は底本では、「消《き》えた美《うつく》しい不思議《ふしぎ》なにじ」となっています。

※初出時の表題は「消えた美しい不思議な虹」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

消えた美しい不思議なにじ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>